

# 原爆の図丸木美術館 調査の記録／改修計画案

## 変化のかけらとその続き

Maruki Gallery for the Hiroshima Panels  
architectural research & renovation project

1967年、原爆の図丸木美術館は、丸木位里と丸木俊による共同制作「原爆の図」連作を常設展示するための小さな空間として開館した。芸術家夫妻がみずから美術館のとなりで暮らしを営み、芸術の仕事を展開しながら、人びととともに多様な活動を行う「場」をひらく試みは、今日の視点からも新鮮で刺激的に映る。

その空間は数年ごとに拡張を続け、美術館は開館時の5倍を超える大きさに広がり、周囲には観音堂やアトリエ、古民家、あずまや、御堂、石碑などが次々と建てられて、「原爆の図」をはじめとする絵画に通底する作者の精神が土地に根ざす、類例のない場所となった。

2017年、原爆の図丸木美術館は開館50周年を迎え、「原爆の図」の保存と美術館の改修を目的とする「原爆の図保存基金」を開設した。そして現在、wyes architectsの齋賀英二郎、八木香奈弥に改修設計を依頼し、未来に向けてあるべき美術館のかたちを模索している。

この美術館の建物は、開館時の設計図面が現存せず、設計者も判然としない。その後のたび重なる増殖、改変、再利用の歴史のなかでも、そのときどきの都合や条件をすりあわせ、その場をしのぎながら、一見非合理的な、しかし絶妙なバランスを形成する必然的な「変化」を繰り返してきた。

齋賀と八木は、積層した時間によって形づくられてきた「変化」に着目し、美術館の各所に残る痕跡を「変化のかけら」と命名した。その「変化のかけら」たちは、今展においても私たちが美術館に流れる歴史の豊かさを再確認するための重要な役割を演じている。そして齋賀と八木は、自身が手がける改修設計もまた、未来へ続いていく美術館の「変化」の一過程だと位置づけている。

建築の歴史と「原爆の図」の接点といえば、1955年に白井晟一が発表した「原爆堂計画」を想起する人も多いだろう。結果的に実現しなかったこの構想は、「原爆の図」のための空間としてありえた、もうひとつの未来だった。

しかし、現実において位里と俊は、ひとりの建築家の思想が反映された空間に「原爆の図」を置くのではなく、いわば「詠み人しらず」の歌のような、無数の人びとの思いとともに形成された空間を「原爆の図」のために残していった。それは無数の人びとを主題として描かれた「原爆の図」にとって、主題と環境の一致と見ることができるのかもしれない。

「変化のかけら」を手がかりに、この美術館に流れる時間を過去から未来へつないでいく。今展は、そのための重要なはじまりの一步である。

原爆の図丸木美術館 専務理事・学芸員 岡村幸宣

変化のかけらとその続き

原爆の図丸木美術館 調査の記録／改修計画案

会期 | 2023年10月7日(土) - 12月10日(日)

会場 | 原爆の図丸木美術館

主催 | 原爆の図丸木美術館

展示制作 | wyes architects

グラフィック | SHIMA ARTS&DESIGN STUDIO

協力 | 川田淳、寺田鵬弘、上浪菜、片桐朱梨



丸木美術館は、大きく分けて5つの建物が集まって全体をかたちづくっている。1967年開館の平屋建て、1970年に移築された小高文庫、1974年増築の別館に、1983年増築の本館2階、1991年増築の新館である。しかし、仔細に見ていくと、新館と同時に増築されたトイレや外水栓を取り込んでつくられた給湯室も、半分独立した建物ともとれる。さらに、建物同士の重なりや、つなぎ、隙間の部分は、自立こそしていないが、建築的な型をもったパーツとなっている。建物全体や美術館という用途から考えれば、本体から取り残されたような部分、例えば増築時に生まれた中間階、物置、渡り廊下（と呼ぶにはあまりに短いつなぎ目）、はっきりした呼び名もつけようのない場面があちらこちらに紛れ込んでいる。こうしたパーツのほとんどは、ふだん来館者の目には触れない裏のスペースであったり、目に届く箇所であっても、掲示や貼り紙など、その他の要素にカモフラージュされたりして、意識されることはない。什器やサインについても同じで、いつの間にか美術館に持ち込まれて、館内を転々とし、そのうち定位置を確保して居座ったり、放っておかれたりしている。

私たちは調査を通して、これらのさまざまな使用と改造の痕跡（美術館の岡村幸宣氏と話をしているなかで「変化のかけら」と命名した）を観察してきた。改修では、「変化のかけら」を少し開いて、来館者も通り過ぎたり、腰を落ち着けたりできる場面へと切り替えていく計画である。階段の途中に挟まれた中間階は北棧敷として小さな作品を鑑賞できる場所とし、細長い廊下は、増築時にふかした壁の凹部に展示壁と向き合う腰掛けを設けて、アートスペースとして展示空間に置き換える。エントランスと新しい執務室兼資料室（旧展示室）を隔てるコンクリートブロックの壁は部分的に取り除いて、奥へと続く美術館を予感させる構えとし、ブロックは2つの室の境に設けるカウンターに転用する。大きな順路や機能は設定しながらも、「変化のかけら」に着目して、ルートを横切ったり停滞させたり、役割をあいまいにしたりする経路、視線、居場所を仕組んでいくことが狙いだ。考えているのは、美術館に流れ／積もってきた時間を、眺め／感じるポイントを見つけ出し、少しだけ目に見えて、肌で触れられるように操作を加えることだ。

本企画展「変化のかけらとその続き 原爆の図丸木美術館 調査の記録／改修計画案」では、1/20のスケールで、改修計画案の部分模型を数点展示した。全体ではなく、部分の模型としたのは、最初に記したとおり、丸木美術館とは、大小（あるいは表裏）いくつもの建築がパッチワーク状に重ね合わされてできた建築だと読み込んだためである。模型を一目見れば、どこを切り取っても同じところがなく捉え所がない、しかしだからこそ、たくさんの表情をもったこの美術館に積層した豊かな時間を感じ取ることができるはずだ。私たちの提示する改修計画案は、作品を次代に送り届けるため、現代に追加する当て布でもある。

丸木美術館には、美術館にとっての芯である「原爆の図」を何度でも振り返る時間と、作品、そして作品とすでに不可分な存在である美術館を未来へとつないでいく時間、2つの時間が常に併存している。「変化のかけら」は、2つの時間を接続するかすがいである。そのかすがいが、強固でしなやかであればこそ、次の20年、30年を丸木美術館が生き抜いていく力になる、と私たちは考えている。

齋賀英二郎＋八木香奈弥／wyes architects

wyes architects ワイエスアーキテクト

齋賀英二郎と八木香奈弥による建築設計事務所。建築デザインに加えて、調査や企画、展示デザインを行う。既存建築の調査（リサーチ）を重視したアプローチで設計する。

